

## サトウガイ(アカガイ)の共同出荷に取り組んで

海匠漁業協同組合青年部  
副会長 鈴木 大作

### (1) 地域と漁業の概要について

私たちの所属する海匠漁業協同組合は、千葉県北東部の飯岡町、旭市、八日市場市、野栄町及び光町の2市3町にまたがり、正組合員数251名、准組合員数333名で構成されている(図1)。

主な漁業は、旋網漁業、船曳網漁業、刺網漁業、貝捲漁業である。平成13年度の総漁獲量は16,426トン、総漁獲金額は13億4千万円であった。このうち私たちが主に従事する貝捲漁業は漁獲量が169トンで全体の1%にすぎないが、漁獲金額は1億3千万円と全体の10%を占めている(表1)。

### (2) 研究グループの組織及び活動

海匠漁業協同組合青年部は、貝捲船団45経営体のうちの若手が集まり、昭和57年に発足した。現在、部員は年齢20～40歳の19名である。今までの主な活動は、先進地の視察研修、漁業の複合化を見据えた新規漁業技術の導入試験、ウバガイ(ホッキ貝)を対象とした貝捲網漁具の開発試験等である。

### (3) 研究の動機と目的

私たちが従事している貝捲漁業とヒラメ一本釣漁業の平成13年度水揚量の内訳は、チョウセンハマグリ45トン、サトウガイ124トン、ヒラメ8トンである。このうち、チョウセンハマグリは、平均価格が1,500～1,600円/kgと高く、漁獲金額の45%に相当する7千万円以上に達する主要漁獲物となっている(図2)。しかし、近年、チョウセンハマグリは減少傾向にあり、将来の漁業経営の不安要素となっている。

そこで、かつては年間1,000トン以上も漁獲されていたものの、昭和57～60年に原因不明の大量斃死で激減し、その後殆ど漁獲されていなかったサトウガイに着目して、資源状況の把握を行ってきたところ、資源が回復していることが判明し、平成11年度から操業を再開した。初年度の漁獲は1.5トンに留まっていたが、12年度44トン、13年度124トンと増加している(図3)。

サトウガイは、アカガイとは極めて近い種類であり、太平洋岸では、千葉県以南の外洋に生息する。アカガイとの違いは、貝殻の模様が異なるだけで、身の外見も味もうり二つであることから、アカガイとして寿司種に使われている。そのため、高級貝類として取引され、かつては1,000～1,500円/kgと高価だったが、現状では、サトウガイの浜値は300～400円/kgにすぎない。

あまりにも低い評価しかされていないため、私たち青年部はサトウガイの価格向上を目指し、市場調査を行い、その後、共同出荷の可能性を探ることにした。

#### (4) 研究・実践活動の状況

##### (i) 市場調査について

単価が低い原因を知るため、平成12年8月に、私たちは築地で市場調査を実施し、築地の仲買業者との意見交換を行った(写真1)。

その結果、築地で扱われているアカガイについて、以下の事が明らかとなった。

- ① 築地では、1日に15～18トン、年間で約5,000トンの取扱いがあり、韓国養殖貝、韓国天然貝、中国天然貝の海外産が、大半を占めていること(表2)。
- ② 国産は、三陸、山陰や四国からアカガイが、愛知、千葉からサトウガイが入荷されていること。
- ③ 7、8月は、アカガイの産卵期なので、品薄となり価格が上昇すること。
- ④ サトウガイは現在、アカガイとして取引されていること。

等が判明した。

この調査で得られた情報から、私たちが共同出荷を行うには、

- ① サトウガイを市場に認知してもらうために、出荷を切らさないこと。
- ② 漁獲されてから短時間で届いた貝であることをアピールすること。
- ③ 選別を確実にし、品質の高い個体を出荷しなければならないこと。

等の留意点が挙げられた。

##### (ii) 共同出荷の実施について

共同出荷について、検討を進めていた平成13年4月、私たちの研修内容を聞きつけた築地の仲買業者から、サトウガイを取り扱いたいとの申し出があった。

私たちが望んでいたことなので、早速受けることにし、視察研修で得た知識を元に、

- ① 海匠漁協のサトウガイを築地市場でアピールするために、ステッカーを作成し(図4)、出荷の際、箱に貼り付けること。
- ② 「サトウガイ」では市場での認知が難しいため、「九十九里赤貝」という名称を付けて、九十九里浜で漁獲されている貝であることを強調すること。
- ③ 当初は、漁獲時に青年部として取り置いたものを出荷する考えだったが、青年部員以外の漁業者の漁家経営向上を考え、出荷量分を相場のできるだけ高値で入札すること。

を決定して、共同出荷に取り組むことにした(写真2～5)。

共同出荷は平成13年5月4日から開始した。13年度は平均週3回(計84回)、1回当たり100～200kgの出荷を行い、取扱量は合計13トンを取り扱った。平成14年5月からは、出荷先が2軒となったが、5月から10月までの実績で、出荷回数が40回、取扱量は5トンと、前年度に比べて減少した。これは、浜値が高くなり、私たちが落札できなかったことによる。

価格面で見ると、浜値は、共同出荷を行っていない平成12年度は、1kgあたり368円であったが、13年度は442円、14年度は、10月までの実績で598円と共同出荷によって上昇した。また、8月の平均価格は、12年度は333円だったが、13年度が735円、14年度が784円に上昇し、共同出荷を行うことにより、消費地の価格が産地に直接反映されるようになった。(図5)。

共同出荷した築地市場での価格は、平成13年度は644円(浜値の1.4倍)、14年度は、757円(浜値の1.3倍)であった。8月の平均価格は、13年度が919円、14年度が1,000円であった(図6)。

### (iii) 冷却蓄養の実施

資源管理のために、貝捲船団はサトウガイの操業を週1～2回に留めているため、共同出荷を行うには蓄養を必要とする。しかし、青年部はこの設備を持たないため、平成13年度は組合の水槽を借りて蓄養を行っていた。ところが、水質の悪化が速く、2日間の蓄養で15%も死亡し、歩留まりが悪かった。そこで、地元仲買業者の蓄養方法を調べたところ、ある程度水温を低くした方が、サトウガイの活性が鈍り、水質の悪化も軽減されることが判ったため、平成14年5月に冷却装置を使用した陸上蓄養試験を行った。

試験条件を飯岡沖の冬の平均水温である14℃として実施したところ、2週間蓄養しても歩留まりは90%以上と良好であった。しかし、試食をすると、蓄養1週間では漁獲直後の味と大差がなかったものの、2週間経つとサトウガイ特有のうま味が減少していた。

この試験結果をもとに、平成14年6月に冷却装置を使用した簡易蓄養システムを整備し、最大1週間の蓄養が可能となった(写真6)。なお、現在の歩留まりは、97%まで向上し、市場における味の評価も良好である。

### (5) 活動成果と波及効果

平成13年度の共同出荷は、取扱金額は900万円、利益は18万円だった(表3)。14年度からは、冷却蓄養を導入したことにより、継続的な出荷が可能になったものの、従来では考えられない高値が付き、落札できない時が増え、取扱量は減少してしまった(図7)。しかし、歩留まりの向上で、利益は30万円に増加した(表4)。

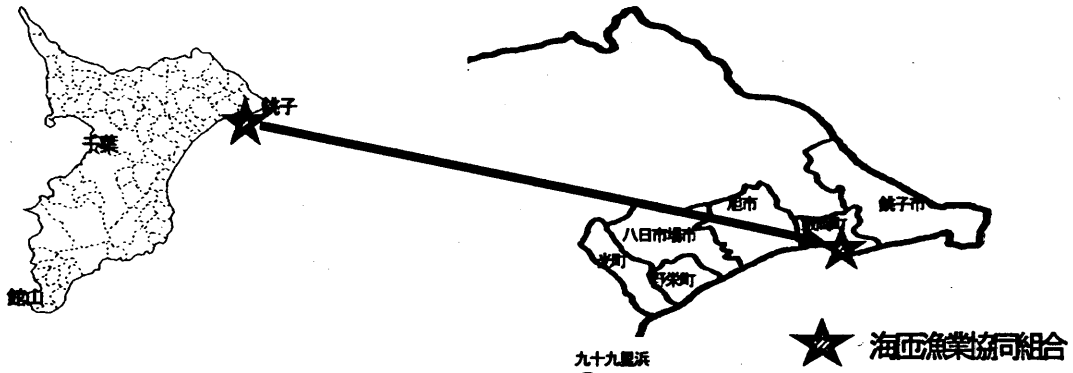
なお、出荷を行っていない12年度、サトウガイの水揚量は44トン、水揚金額1,619万円だったが、14年10月までは価格の向上で、80トン、4,784万円になった。仮に、12年度の浜値を基準に、14年度の水揚金額を計算すると、2,944万円(368円×80トン)に留まるため、貝捲船団全体の漁業収入を、1,840万円上昇させられたと考えられる。

### (6) 今後の展開

私たちの共同出荷により、ねらいどおり浜値は向上したが、青年部が落札できない時が増えてしまい、共同出荷が停滞する矛盾が表面化してしまった。

ただ、共同出荷を中止してしまえば、浜値が再び下落してしまうことは確実に考えられる。しかも、現在のサトウガイの価格は、まだかつてに比べて著しく安い。現状では目的を十分達成したと言えないため、出荷先を増やす努力に加え、蓄養能力を増加させると共に、安定供給が可能な体制を整備し、浜値向上と資源管理型漁業の両立を図っていきたいと考えている。

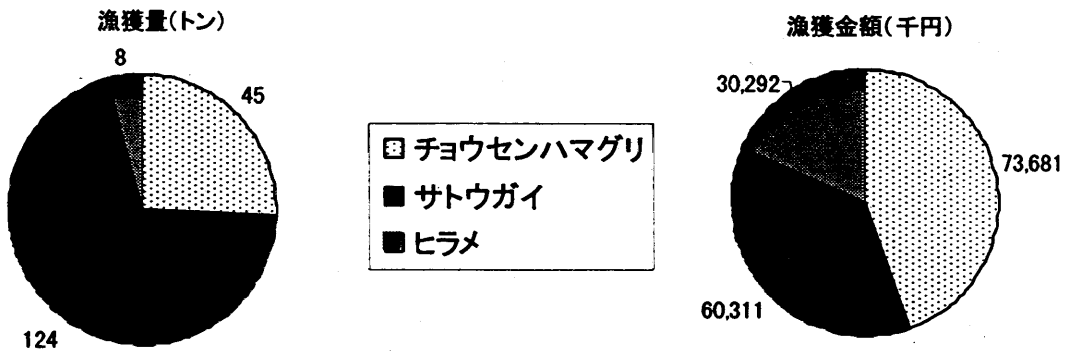
また、私たちの将来の経営安定と所得の向上のため、現在手がけているサトウガイだけでなく、ハマグリ、ダンベイキサゴ等漁獲される他の貝類すべてを私たちの手で共同出荷できる体制をつくる努力も続けていきたいと考えている。



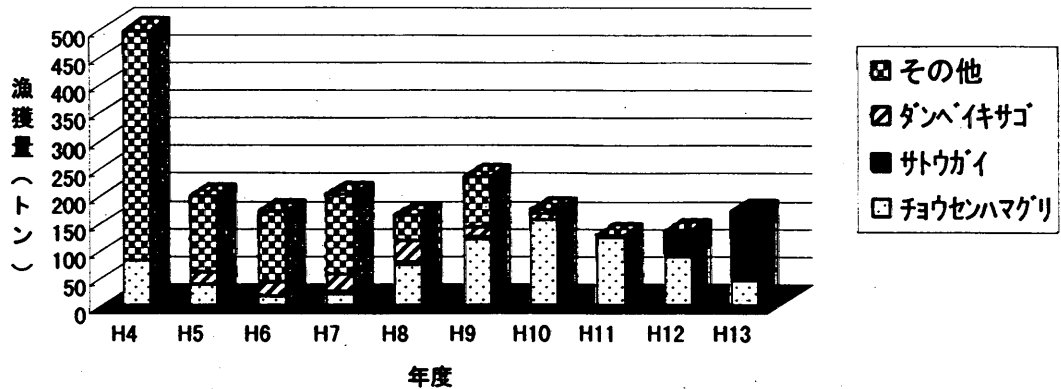
(図1) 海匠漁業協同組合位置図

(表1) 最近3ヶ年間の漁業種別水揚高 (数量：トン，金額：千円)

年度	漁業種類	貝捲網	船曳網	固定式刺網	旋網	釣り漁業	合計
	11	数量	124	591	56	19,947	8
	金額	170,098	239,825	81,429	1,102,626	34,032	1,628,010
12	数量	106	882	46	13,247	8	14,289
	金額	112,971	248,379	74,427	758,441	32,280	1,226,498
13	数量	169	575	51	13,459	8	14,262
	金額	133,990	431,582	83,617	658,433	30,292	1,337,914
3年 平均	数量	133	683	51	15,551	8	16,426
	金額	139,019	306,595	79,824	839,833	32,201	1,397,504



(図2) 平成13年度漁獲実績



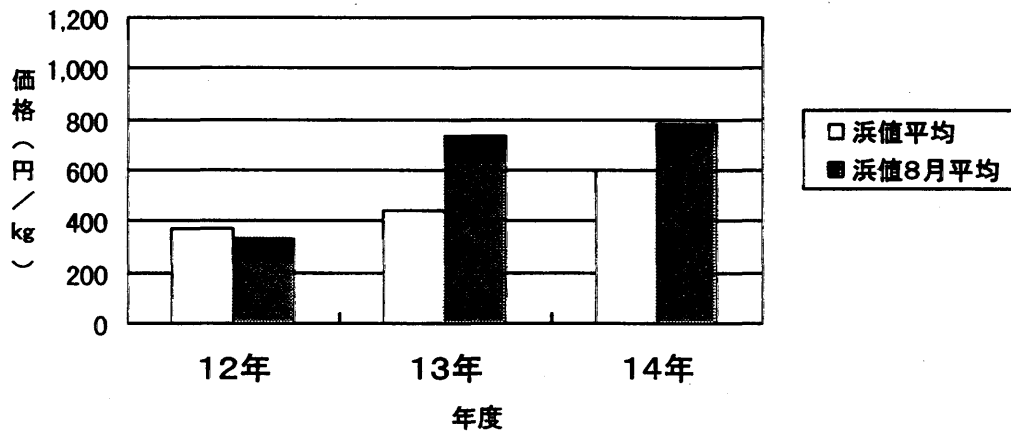
(図3) 海匠漁業協同組合貝捲船団の貝類漁獲状況

(表2) 築地魚市場で取り扱うアカガイの特徴について (平成12年度)

産地種類	韓国天然貝	韓国養殖貝	中国天然貝	四国養殖貝	三陸天然貝
1 kgあたりの単価	700~800 円	1,400~1,500 円	700~800 円	小 800~1,000 円 大 1,800~2,000 円	3,000~3,500 円
特 徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形が大きい。</li> <li>・養殖貝に比べると殻が重い。</li> <li>・身は殻の割合に比べて少ない。</li> <li>・日持ちが悪い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形が小さい。</li> <li>・輸入アカガイの中で一番単価が高い。</li> <li>・輸入量が一番多い。</li> <li>・天然貝に比べると身が多く、歩留まりが良い。</li> <li>・夏場でも、日持ちが良い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国産天然貝と品質が似ている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・四国で養殖されたもので、国内産として出荷されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・禁漁期間中の7~8月は出荷が少なくなる。</li> <li>・9月以降、市場に卸される。</li> <li>・国内産で、最も人気が高い。</li> <li>・「ゆり上」という名称が付いている。</li> </ul>
出荷方法	缶	発砲スチロール	10kg缶	発砲スチロール	発砲スチロール
備 考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国西側(中国)で漁獲後、缶に入れられて下関に輸入されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の業者が輸入し蓄養後、発砲スチロールに詰めて出荷している。</li> <li>・韓国では、稚貝を育てた後、直蒔き養殖を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・航空便で輸入される。</li> <li>・10kg缶に8kgのアカガイが入っている。</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・築地に入ると、かなり値動きが激しい。</li> <li>・出荷量が多いときは、値段が下がるが、平均単価は高い。</li> </ul>

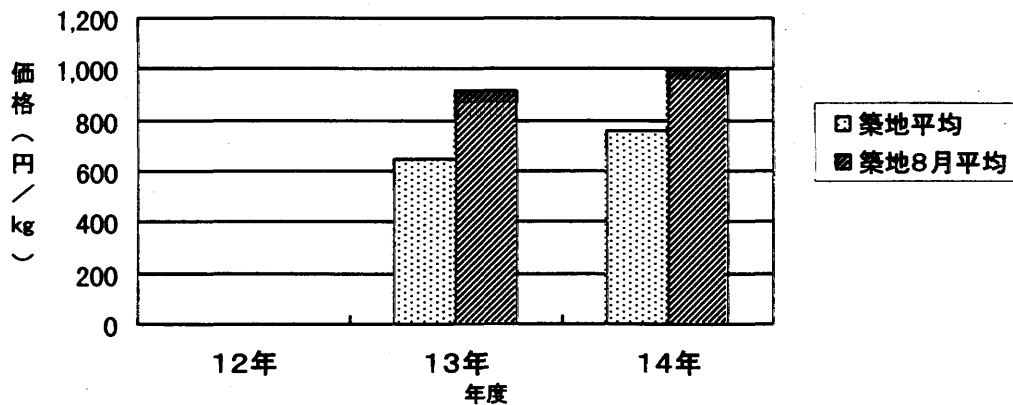


(図4) 共同出荷のステッカー



(図5) 平成12~14年の浜値価格の推移

(注) 平成14年度は、4~10月までの築地市場価格平均



(図6) 平成12~14年の築地市場価格の推移

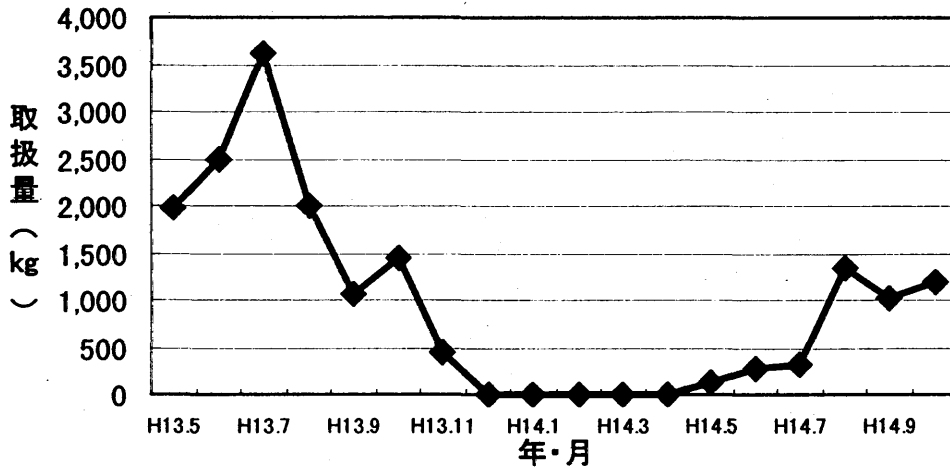
(注) 平成14年度は、4~10月までの築地市場価格平均

(表3) 平成13年度共同出荷の経常収支

取扱量 13トン

収 入		支 出	
項目	金額(千円)	項目	金額(千円)
販売金額	9,000	必要経費 (内訳) 原料購入費 青年部活動費 箱購入費 運送費 ステッカー作成費	8,823
計(A)	9,000	計(B)	8,823

利益:(A)-(B)=177(千円)



(図7) 共同出荷の取扱量の推移

(表4) 平成14年5～10月までの共同出荷の経常収支

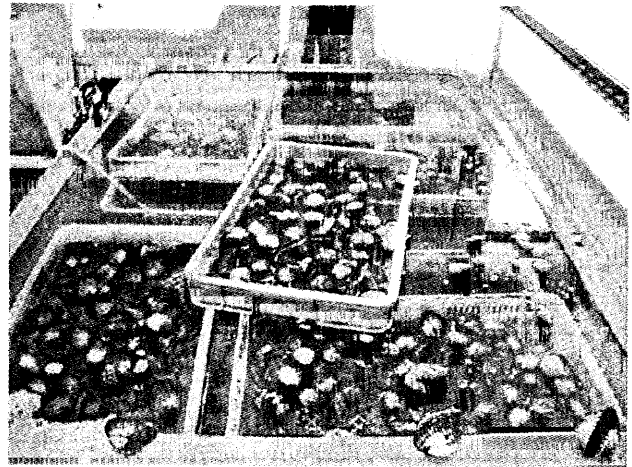
取扱量 5トン

収 入		支 出	
項目	金額(千円)	項目	金額(千円)
販売金額	3,989	必要経費 (内訳) 原料購入費 青年部活動費 箱購入費 運送費 ステッカー作成費	3,683
計(A)	3,989	計(B)	3,683

利益:(A)-(B)=306(千円)



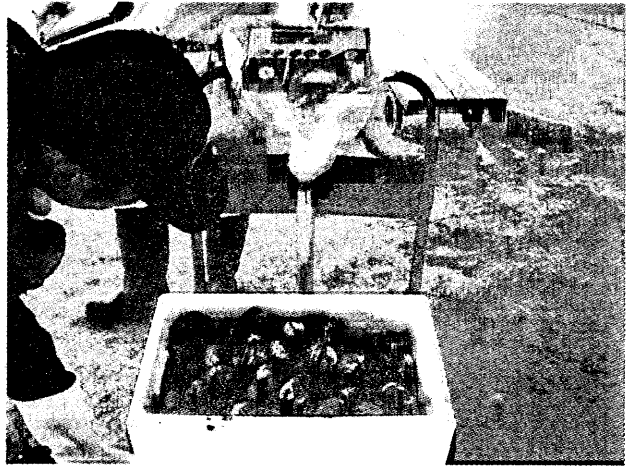
(写真1)築地魚市場視察風景



(写真2)サトウガイの砂出し



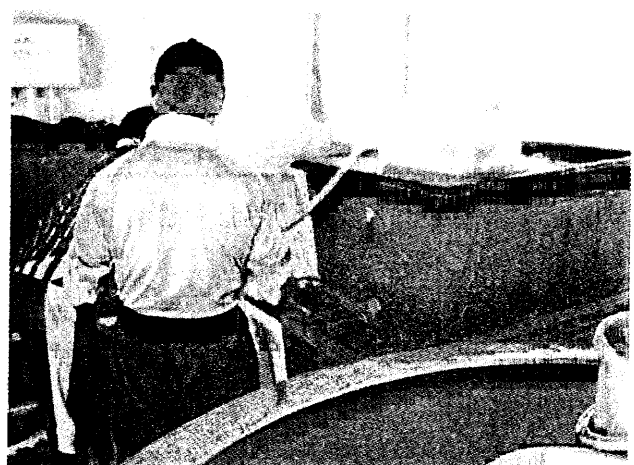
(写真3)サトウガイの選別



(写真4)箱詰め重量の測定



(写真5)箱詰め完了時



(写真6)サトウガイの冷却蓄養